
好きな男の条件

未沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな男の条件

【Nコード】

N4261X

【作者名】

未沙

【あらすじ】

イケメン好きのイケメン好きによるイケメン好きのための物語

好きになった男は○○でした

私、恋人に求める条件はたったひとつです

すばり、イケメンであること!!

毎日イケメンだけ見て暮らしたい

イケメン以外の男は、私の前には死んでも現れないでね!!

…は言い過ぎ?

とにかく、私はイケメンが大好きなんです

イケメンだけが男なんです、私の中で

イケメンだけを見て、イケメンだけに愛されたい

それが私の生きる道！！

…なんだけどなあ…

私は、横を歩く男に目を向けた

こいつは、顔立ちは全然かっこよくない

俗にいうブ男ってやつ？

目にしたくないブ男

一緒に歩くなってもってのほか

けど、付き合っちゃった

なんで付き合うことになったかって？

告白したんだもん、私が！！

あろうことか私は、イケメンとはかけ離れた、月とナメクジ以上に
かけ離れた男を好きになってしまった

ほんっとうに恋って分からない

これは、そんな2人の物語

ガールズトーク

私は、高橋結。今年、華の高校生になりました☆

高校生になったら、友達つくって放課後に制服プリ撮って、マクドとかでガールズトークして、1コ上のイケメンな先輩に恋して…

って理想を抱きながら高校に入学。

そして実際、友達も出来て、放課後に制服プリいっぱい撮って、マクドじゃなくてサブウェイでけどまあガールズトークして、1コ上の…

「うちの高校イケメンがない!!」

サブウェイで私は叫んだ。

今日もいつものように、放課後友達と街へくり出して、プリに飽きたからいつものサブウェイでしゃべってた。

今日の話題は、好きなタイプについて

どんな人がタイプかを語っていたら、うちの学校にはイケメンが誰一人いないことを思い出し、先ほどのセリフに至る。

「またイケメンの話？」

親友のあきが言った。

「だって、本当にいない?!」

「いないけど、性格良い奴はいっぱいいるよ?」

「私はイケメンがいいの！！イケメンじゃないなら付き合わないし、好きにもなれない！！」

私はそう言ってジュースを飲み干した。

「本当に結はイケメンが好きだね」

今度は親友の伶が言った。

「だって、イケメンって最高じゃん？イケメンは…」

「はいはい！！そーですねイケメンは良いですね！！」

あきが叫んだ。

「何よ!!」

「結のイケメン理論は聞き飽きた」

「だってイケメンがいいんだもん!!」

あきがため息をついて、言った。

「結、あんたね、イケメンばかり探してたら、気がついたらオバサンだよ」

「オバサン?!」

「イケメンだけを探し続けて70年。未だに彼氏はいたことありません。今日も私は老人ホームでイケメンを探しています…そんな人生になるよ!!」

ろ、老人ホーム？老人ホームでイケメン探し？！

「それは嫌！！」

「だったらイケメンに固執しなさんな」

そう言ってあきはジュースを飲んだ。

「いーよなー伶は、あーんなイケメンの彼氏がいて」

私はストローをいじりながら、伶に言った

「結、男なら紹介するよ」

伶はそう言って微笑んだ。

その笑顔が微妙に悔しかった。

確かに、私はイケメンに固執してる。イケメンを探し続けて、彼氏いない歴〓年齢というのが今の私の現状だ。

けど、イケメンじゃないなら彼氏なんていらぬ。私は、イケメンだけを見て暮らすんだ!!!

と、まだまだ「!!!」をつけたいぐらいの決心でイケメンを探してる。イケメン以外を好きになるなんて、有り得ない。

「結、何でそんなにイケメンがいいの？」

あきが言った。

「え？」

「あまりにイケメンイケメンってこだわるからさ、イケメンに良い思い出もあんのかなって思ってる」

「…だってさ、イケメンの彼氏の方がいいじゃん？ブサイクより」

「まあ…そうだね」

私は手に握った汗をスカートで拭いた。

うまく言えたかな。

「ところでさ、明日、うちの高校の近所の大学で学園祭やるよね？」

あきが話題を変えて、少しホッとした。

「そうなの？」

「一緒に行かない？」

「行く！！伶は？」

「あーごめん、明日はパスだわ」

「まじでー？」

「うん、明日は彼氏と約束あんの」

「そっかあ…」

あきは残念そうだ。私も残念だけど。

「じゃー明日は1人で結のイケメン話聞かされるのかあ…」

「おい!!」

あきがケラケラ笑った。伶もつられて笑った。

私もなんか笑えてきた。

…うん、何か心地いいな、この2人といると

ボーイズトーク〜大地編〜

俺は山下大地。今年の春、晴れて大学生になった。

ついに大学生だ。

中学や高校の時とは違う、今度こそ大人なんだなっていう感じがした。

もうひたすらに勉強しなくていいんだ。

独り暮らしするために借りたアパートのまだ慣れない匂いをかぐ度、大学への通学路を歩く度、大学生になった実感を少しずつ噛みしめていった。

俺は身も心もフレッシュだった

「山下あ、合コンしよーぜー」

俺の小さな感傷は、ダチの小坂によって破られた

「やっぱ大学生ときたら、合コンじゃん？俺、まじで彼女ほしいー
！！」

生まれてこのかた彼女がいたことがないのだ

それは別に良いんだが、だからって俺に愚痴るのは止めてくれない
かね？

俺だって彼女ほしいよ、そりゃ

けど、俺の顔じゃあまず女は寄ってこないし、何より、俺女ってあ
んまり好きじゃない

平気で嘘つくし、やたらにしつこいし。めんどくせえや。

「なあ山下あ、合コンしよーぜー、しよーぜえー」

「うるせえー！！」

一喝してやった。ったく

「山下は女いらないの？ お前浮いた話ほんとに聞かないけど」

「俺は今はいいや」

「なんで？」

「…別に」

某有名人のように答えた。

だって、俺の女いらない本当の理由なんて、ちっぽけなモンだぜ？
みみっちいみみっちいモンだからさーって言えるかよ

「つか小坂さ、逆になんでそんなに合コンしたいんだよ。お前イケメンだから女寄ってくんだらろ？」

逆に聞いてやると、ヤツはんーとかむーとか言って

「なんか、青春したいから」

って言った。

何だよそれ、

「つかさ、来週から学園祭だぜ?! 可愛い子来るかなあ?」

「ああ、来週かあ」

「可愛い子来たらいいな」

「ナンパすんのか?」

「ナンパとは人聞き悪いな、声かけるんだよ」

「一緒じゃねーか」

「山下、お前も一緒に彼女つくろうぜ」

はあ?

「俺はいいよ」

「よくない！！俺はお前に幸せになってほしいの！！」

俺はお前の彼女かよ、まったく

「わーったわーった、努力します」

「よっしゃー、頑張って彼女作るぞー！！」

これ、浜辺で夕陽に向かって叫んでたら絵になるんだけどなあ…

大学の帰り道の若干ヤバイ道のだ真ん中じゃあ絵にならないよね

俺は意気揚々と歩く小坂の背中を、半歩後ろで見ていた。

出逢い part 1

「ね、今すっごいイケメンいなかった?！」

「あつ、またイケメン!!」

「すごいね、この大学イケメン多い!!」

私は、さっきからすれ違うイケメンに目移りしていた。

今日は高校の近所の大学の学園祭当日。

あきと連れ立って大学へ行き、学園祭を楽しんでる。

何せこの大学、イケメンが多い!!

爽やかなイケメンもいれば、ワイルドなイケメンに、知的そうなイケメンもいる。

まさに、イケメンの宝石箱やあゝ!!

「結局いつまでイケメン探ししてんの?!」

あきが横で叫んだ。

「だってこの大学、イケメンがいっぱいいるんだもん!」

「そうだね、イケメンは多いね…」

「でしょー?!」

「じゃなくて!さっきからイケメン見つけてはイケメンイケメン騒いでさあゝほんつとに恥ずかしい!!みんな見てるよ」

…そういえば、周りの視線が冷たい

「あたしさあ、クレープ屋台行きたいの!!ほら、行くよ!!」

あきに腕をつかまれ引きずられようとしたその時。

「あっ!!」

私は叫んだ。

目の前に、すごいタイプのイケメンがいたから!!

何ていうのかな…爽やか系で、ちょっと可愛い感じのする…とにかく、私好みのイケメンが、木陰に立っていた。

「ね、あそこにすごいタイプのイケメンいるんだけど!」

私はあきの腕をバンバン叩きながら言った。

「痛い痛い!何、どこに?」

「ほら、あそこ!」

私は彼の方を指した。

「…ふーん」

あきは彼を見てそう言う

「結にもイケメンの好みとかあったんだ…」

「は？」

「いや、イケメンなら何でもいいのかなんて思ってたから」

「それだったらただのメンクイじゃん！」

「いや、実際そうじゃん」

…

私は言葉を返せなかった。

「で？」

あきが言った。

「で？とは？」

「タイプのイケメン見つけてどうすんの。鑑賞して終わり？」

「…」

かなりタイプのイケメンを見つけたらどうするか？

ただ遠くから見つめて終わる？

少し、少しくらい話したい！

けど…

「あきい、ちょっと声かけてきてよぉ」

私はあきにすり寄った。

「は?! 何であたしのよ?」

「だって、声かけるの恥ずかしいもん!」

「はあ?!」

「あきがちよつと話しかけてみてよお」

「何であたしが行かなきゃなんなのよ! ワケ分かんない」

「あき姉さぁん、お願い!」

そんなこんなでしばらくヤイヤイ言い合っていると

「あ」

「何?」

「ごっち見てる」

イケメンを見ると、彼はこっちをじっと見ていた。

「ほら、見てるよ！」

「えっ、えっ、どうしようあき！」

「：手でも振ったら？」

あきがそう言うから、私は彼に手を振ってみた。

彼は笑顔で振り返してくれた。

「やー！どうしようあき！」

「結、こっち来たよ」

「え？」

ほんとだ。さっきより彼がよく見える。

…ってそうじゃなくて！

どうしよう！どうしよう！何したらいいの？！

私の脳内はパニック状態だった。

「どうしたの？」

アタフタしてるうちに、彼がやってきた。

「え、いや、あの、その…」

「すみません、クレープってどこで売ってますかあ？」

あきが助け舟を出してくれた。ナイスあき！

「ああ、クレープならあっちだよ」

「ありがとーございまーす♪」

あれ？会話終わっちゃった！

「道分かる？一緒に行こうか？」

そう言ったのは、彼だった。

「え、いいんですか？！」

私は思わず言った。

「いいよ、俺友達待ってるから、そいつ来たら一緒に行こうか！」

うそ！

世の中ってこんなに上手く出来てたっけ？！

とりあえず、彼と歩けるチャンスをゲットできたなんて、結感激！

しかも彼の友達って、絶対イケメンだよ！イケメンにはイケメンの友達がいるもんだよね！

私のテンションは急上昇した。

そこへ

「小坂！」

ブッサイクな男がやってきた。そいつはこっちに向かって歩いてきてる。

え？何で？何でここにきてんの？キモいんですけど。

だけど

「よお大地！遅かったなお前」

彼はまるで友達のように彼に話しかけている。

「わりいわりい、ちょっと色々あって」

ブ男もまるでイケメンな彼が友達であるかのように話しかけている。

そして

「じゃ行こうか」

イケメンな彼は、私たちに向かって言った。

…てことは…

「あの、お友達って…」

私はさりげなく聞いてみた。するとイケメンな彼はさらりと

「ん？コイツのこと」と指さした。

指の先には例のブ男。

うそおおお！！

こんなにイケメンの彼に、こんなにブツサイクな友達がいるなんて、
世の中どうかしてるよ！

私はめまいをおこしかけた。

大地のつぶやき

小坂め。あいつガチで彼女欲しいのかよ。

俺は小坂の横にいた女の子2人を見て思った。

元気そうな子と、しっかりしてそうな子の2人連れ。

しっかりそうな子はともかく、元気そうな子はずっと俺を見て睨んでやがる。

小坂が俺を紹介したら、エーッ、ウソーといわんばかりの顔をして俺を見た。

…俺が冴えない顔つきだからだろう、な。

俺と小坂が友人だと知ったら、女子はたいてい驚いて、あの女の子がしたような顔をして俺を見る。

そりゃそうだろう。

イケメンな小坂と冴えない俺が友人だなんて、誰が思う？

彼女の顔が、その答えをよく物語っていた。

だから嫌なんだよ。女って

すぐ見かけで人を差別する。

中身を見ようだなんて考えもしない。

だけど、

だけど…

彼女だけは違った。

あの日あの時あの場所で会った彼女だけは…

伶

翌日。

「…ねえ結、あんたいつまでニヤニヤしてんの？」

あきが呆れた顔で聞いた。

「いやぁ…昨日は楽しかったね」

私はとろけそうな声で言った。

昨日はあの後、小坂さんとあきと例のブ男と私でキャンパス内をうろうろした。

例のイケメンさんは小坂健太って名前で、なんと私たちの高校出身で、そっか後輩なんだって意気投合して、帰り道にはメアドまで交換して…

幸せな1日だったなあ…

「まあね、昨日は楽しかった…って、いつまでニヤニヤしてんの？
！」

「いやあ、小坂さん素敵だったから…」

「小坂さんて、イケメンな人？」

「うん♪」

「私は山下さんの方がいいなー、話してて楽しいし」

あきの一言で、私は凍りついた。

山下さんとは、例のブ男のこと。山下大地って名前で、ノリ悪い、話合わない、面白くないと最悪なヤツだった。

私が小坂さんとばかり話すから、あきがヤツとも話すよう言ったから少し話したけど、あんなに会話したくないと思った男は初めてだった。

「中身までブサイクなのに、あきよく話せたね」

「普通の人だよ？顔だって言うほどブサイクじゃないし」

は？！

「あき様、あなたの目は節穴でいらっしやいますか？」

「うわムカつくっ」

「おはよー」

伶が登校してきた。

「おはよー…って、伶どうしたの？！顔のバンソコ？！」

伶の顔には、痛々しいバンソコが貼ってあった。よく見るとあざがある。

「…うん、ちょっと転んじやって」

伶がぎこちなく答えた。

転んだぐらいであざなんか出来るかな…

けど、伶が言ってるんだから本当なんだろうなって思って

「大丈夫？」と返した。

「大丈夫だよー」

伶は笑って答えた。

その笑顔が妙に、なんとなくぎこちなかったのが気になった。

伶、大丈夫かな…

「ね、昨日の学園祭どうだったの？」

伶はいつもの笑顔で聞いてきた。

「きいてよー、昨日ねー」

私が話す話を、伶はいつものようにニコニコしながら聞いていた。

「へー、小坂さんってそんなにイケメンなんだ!」

「イケメンなんてもんじゃないよ、本当に素敵な人だよ!」

「いいなあ、行きたかったなあ…」

伶は羨ましそうに言った。

「伶はしょーがないじゃん、彼氏と約束あったんだから」

あきが言った。

「…そうだね」

伶が寂しそうに言った。

…伶？

「あのさあ、昨日ね…」

急に伶がしゃべりだした。その口調は、なんていうのかな、すごく重くて、寂しげで、つらそう…

「…別れたんだ。彼氏と」

私たちの空間に、静かな、けど重い空気が流れた。何か言いたいの、言っちゃいけない何かがある。

「…ごめん、伶、無責任なこと言って…」

あきが辛そうに口を開いた。

「え？何で？あきは全然悪くないよ！」

「けど…」

「いいの。むしろスッキリしてるから」

「え？」

「だって、もう耐えられないから」

…耐えられない？

「何が？」

「…あつ、ゴメン…忘れて、ね？」

伶はうろたえた。

ちょうどその時、チャイムが鳴った。英語教師が入ってきて、「席に着けー」って言うてる。

伶が自分の席に帰っていく。

その背中を見送ることしか出来ない自分が、たまらなく嫌だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4261x/>

好きな男の条件

2011年11月23日22時59分発行